

【腰部脊柱管狭窄症（腰痛、下肢痛） に使われる薬】

腰部脊柱管狭窄症の病態からみた治療には、日常生活指導、薬物療法、その他保存療法として物理治療や神経ブロック治療などがあります。それでも効果がない場合は狭窄部分の除圧を目的とする手術も可能です。

薬物療法には痛みをとったり、血行をよくしたり、気分をリラックスさせる薬が使用されます。

(1) 鎮痛剤としてはロキソプロフェン（ロキソニン®）、ジクロフェナク（ボルタレン®）などの非ステロイド性抗消炎鎮痛薬（NSAIDs：エヌセイドと呼ばれている）が代表的な薬です。副作用として胃潰瘍、腎機能障害などがあります。NSAIDsの主たる作用はシクロオキシゲナーゼ（CO-X1 と CO-X2）を阻害することで、いわゆる発痛物質の一つとされるプロスタグランジンの産生を抑制するものと考えられています。最近では、CO-X2 選択的阻害薬（ハイベン®、モービック®）といわれる胃腸障害が少ない薬が臨床で使われるようになってきました。鎮痛効果と副作用のバランスを考えて選択することが必要です。

(2) 筋弛緩薬のエペリゾン（ミオナール®）、チザニジン（テルネリン®）は、痛みのために筋肉が収縮し、こった状態に対して筋肉の緊張を和らげることにより、痛みを軽減します。症状により NSAIDs と併用することもあります。また、

血管を広げ筋肉の血流を増やす作用があり、末梢の循環障害を改善します。副作用としてふらつき、眠気、胃部不快感などの胃腸障害などがあります。

(3) 循環障害改善薬（プロスタグランジン製剤）のマプロスト（プロレナール®、オパルモン®）は、血管を広げ赤血球の変形能を改善し、血液を固まりにくくする作用があります。圧迫による神経の循環障害に基づく疼痛、冷感、しびれ感、潰瘍などを改善します。副作用として腹部不快感などの消化器症状や出血しやすくなるなどの副作用があります。

(4) ビタミン B12 は神経組織を障害から回復させるのに有効です。しびれの自覚症状の改善目的に使用されます。

(5) 抗不安薬は不安・緊張・いらいらを和らげるので、心と体をリラックスさせる目的で広く使われます。副作用として眠気、ふらつき、脱力感を起こすことがあるので、特に転倒などに注意が必要です。

このような薬物療法は原因を取り除く根治療法ではなく、あくまでも症状の寛解を目的とした対症療法です。使用する薬の効果、副作用などを十分に理解していただき、漫然と使用せず主治医の指示通り服用してください。気になる症状があった場合には早めに医師または薬剤師に相談してください。

（薬剤科長 富澤 達）

くす 通信

第107号
2009年2月1日

下肢症状をとともなう腰痛について 腰部脊柱管狭窄症に使われる薬 （腰痛、下肢痛）



「紅梅」：薔薇科

くす(樟)は常緑の広葉樹で、熊本城内に多く見られます。種々の精油成分を含み、良い香りがします。樟脳をはじめ色々な薬用成分が抽出されるなど有用な薬用樹でもあります。また、くすし(薬師)とは、医師のことを指し、くすしぶみ(薬師書)は医術に関する書物のことを言います。本紙はこのくすにあやかり、健康な生活を送るために情報を提供します。気楽に読んで健康を守りましょう。

診療時間 8:30~17:00

(診療受付時間 8:30~11:00)

ただし、急患はいつでも受診できます。

(診療科目) 総合医療センター〔総合診療科、血液・膠原病内科、内分泌・代謝内科、腎臓内科(腎センター)、神経内科(脳神経センター)、呼吸器科(呼吸器センター)〕、**心臓血管センター**(循環器科、心臓血管外科)、**消化器病センター**(消化器科)、精神科、小児科、外科、小児外科、整形外科、脳神経外科(脳神経センター)、形成外科、泌尿器科、産婦人科、**感覚器センター**(眼科、耳鼻咽喉科、皮膚科)、気管食道科、リハビリテーション科、**画像診断・治療センター**(放射線科)、麻酔科、歯科・口腔外科、**救命救急センター**、人間ドック、脳ドック

診療科の特色：整形外科



(整形外科 橋本伸朗)

整形外科は、骨・関節や靭帯・筋肉、脊椎・脊髄疾患の治療を行っています。現在5名の日本整形外科学会認定医と1名の整形外科研修医が常勤しており、年間約1000例の手術を行っています。救命救急センターに属しているため、外傷や骨折に対する手術症例が半数以上を占めますが、変形性膝関節症・変形性股関節症に対する人工関節置換術(年間100例)脊椎・脊髄疾患に対する手術(年間170例)などにも取り組んでいます。

患者さんへの負担が少ない小切開による低侵襲手術も積極的に取り入れており、ほとんどの患者さんが手術翌日に離床し、リハビリを開始することが可能になっています。

【下肢症状をともなう腰痛について】

腰痛は誰もが経験したことのある症状ではないでしょうか。一般的には、無理をしなければ、自然に軽快する腰痛症が全体の8割以上を占めています。しかし、なかには専門的な治療を要する場合があります。①腰痛が3~6週間以上続く場合、②下肢に痛みやしびれをともなう場合、③排尿・排便の異常を伴う場合などは、脊椎骨・椎間板や脊髄の病気が潜んでいることがあり要注意です。まずは整形外科、できれば脊椎・脊髄の専門医がいる病院を受診し、原因を特定することが、治療の第一歩といえます。

日本は、高齢化社会に向かっています。今増えているのが、腰部脊柱管狭窄症と呼ばれる病気です。これは特殊な病気ではなく、年齢を重ねるにつれて誰にでも起こるものなのです。年齢と共に腰部の脊椎が変形し、中にある脊髄を圧迫することにより、日常生活に支障をきたす、間歇跛行(かんけつはこう)という症状を起こします。症状の特徴は、座っていたり、横になっているときは症状はないのですが、立って同じ姿勢を続けたり、歩行を続けると臀部から下肢に痛みやしびれが現れ、歩けなくなるというものです。しゃがみ込んで休んでいると症状が軽快しますので、また歩けますが、そのうちまた症状が現れ、しゃがみ込んでしまいます。このように休み

休みでないと長距離が歩けなくなります。診断には、この間歇跛行という特徴的な症状があれば、まず間違いありませんが、検査としてはMRIが有用です。MRIには20分程度の撮影時間が必要ですが、脊髄そのものを映し出すことができるので、圧迫部位の同定に大変役立ちます。

治療としては、加齢によって変形した脊椎を若返らせ、圧迫を減らすことはできませんが、症状を軽減させる方法があります。圧迫された神経の血流を改善させるプロスタグランジンE1製剤の内服によって、約6割の患者さんで間歇跛行が改善しています。ただ、「下肢の麻痺があり筋力が低下している」「痛みやしびれが陰部にも現れる」「下肢のしびれや痛みが安静時にも現れる」などの症状がある場合は、脊髄の圧迫を取り除くための手術が必要な場合がありますので、すぐに整形外科に御相談下さい。

(整形外科部長 橋本 伸朗)

国立病院機構熊本医療センター

NATIONAL HOSPITAL ORGANIZATION KUMAMOTO MEDICAL CENTER



〒860-0008 熊本市二の丸1-5

電話 096(353)6501(代表)

FAX 096(325)2519

ホームページ <http://www.hosp.go.jp/~knh>